108 学年度第 1 学期　ワンアジア財団国際講座

「人文通識：アジア共同体:東アジア学の構築と変容」シリーズ講座（1）

講題:台湾における東アジア学研究構築とその発展

中国文化大学 108 学年度ワンアジア財団国際講座第 1 回は、徐興慶学長自身による「台湾の東アジア学研究構築とその発展」と題された講座であった。学長は、講義の開始に当たって、当課程はもともと外国語文学部で開設されていたものであったが、本学の全学生に講座を選択する機会を得させるために、当学年度から「人文通識課程」に改めることとなった、と述べた。この課程は開設を容易に申請できるものではなく、昨年から日本の一般財団法人ワンアジア財団の助成を幸いにも獲得できてから始められ、毎週、異なる学者を国内外から招聘して開講する形式で授業を行うというものであり、学長は特に熱心な授業参加の学生に対して、皆が毎週、様々な領域のトップクラスの学者と対話するという得難い機会を持つことを希望し、学期末には学生が多くの学問的収穫を得られると確信している、と述べた。

ワンアジア財団の「将来に向けたアジア共同体の創成に寄与する」という理念は、深い思索を持つ課題である。近年のアジアの情勢は混乱を極め、中米貿易戦争の誘発した政治や経済は、文化や教育の火花を通じて、おそらく今後 10 年間の影響を与える可能性を持つ。このような政治や経済の情勢のもとで、皆がこの課程を通して、過去を遡って思考し、例えばヨーロッパが如何にして EU（乃至、ユーロ）を成立せしめたか、といった問題を理解することを希望し、その中で数々の辛酸を嘗めたヨーロッパで過去に起きた戦争・歴史・領土問題などの複雑さはアジアにおいても同様であり、皆が EU やユーロの成立過程を通して、アジア共同体やアジア経済通貨成立の可能性を共に考えることができるようにする。こうした思考を課題として、東アジア学は一つの知識を探求することになる。

「アジア共同体」の概念は夙に 100 年前に提出されていたが、その実現可能性は低く、多くの人々が積極的に進めようとはせず、アジアはまた戦争と歴史に纏わる多くの不幸と難題が発生している。現在の中日関係や日韓関係、及び、近隣諸国の関係は安定しておらず、このため、アジア共同体の創設は依然として大きな問題となっている。ワンアジア財団の佐藤洋治理事長は、「アジア共同体」の実現のために、まず「自我の壁」「企業・団体の壁」と「国家・民族の壁」など三つの障害を取り除くべきだと示した。このために、その財団は教育の成果を通して、異文化理解の重要性と「戦争のない世界」の平和の提言を行った。

学長は引き続き以下の七つの学術講演の内容について逐一、自らの構想による当面の目標を以て、自らの関係する東アジア学構築の仕事として示した。

一、異文化相互理解の観点から、台湾の東アジア学研究の構築、及び、その発展を探る。
二、異文化の観点から国際日本研究の可能性を見る。
三、日本研究から台日交流 120 年を見る。
四、東アジアの知識交流—越境・記憶・共存
五、台日アジア未来フォーラム（公益財団法人渥美国際交流財団、台湾大学、元智大学共同主催）
六、東アジア日本研究者協議会（徐興慶学長と中国・日本・韓国の第一線で活躍

する専門家による共同創設）

七、台湾・中国文化大学「東アジア人文社会科学研究院（中国文化大学の学内学術資源を統合するために創設）」の任務

学長は、台湾の「国際東アジア学」の構築の上で、なお「各国の東アジア学研究者と研究機関がすべて更に協力し合う」という課題の解決を待つことを示唆した。本学では多くの学部が協力し合って、「陽明山学」の計画書を提出し、深い学問がまた非常に価値ある発展となるであろう、と述べた。このほか、国際化、及び学際化を重視する際に、学長は絶えず「なぜ台湾に日本研究が必要なのか？　如何に発展させるべきか？　どのような方向に突き進むべきか？」などの問題を考え、2010 年 10 月に自ら主催した「台日相互理解の思索、及び実践」の日本研究フォーラムを紹介した。このフォーラムでは日本の文化庁長官だった青木保教授を招き、青木先生は「異文化の視覚—国際日本研究の可能性」というテーマで講演され、その中で異文化の相互理解を強調し、各人各様の客観性の重要さを尊重すると述べた。

学長は引き続き「国際日本研究」について説明した。国際日本研究は国際台湾研究・中国研究・韓国研究と同じく、普遍的な人類共通の学術形式を採用し、各国・各地の文化、及び生活形式が持つ特性、或いは意味を掘り下げる作業である。国際日本学の中には、政治・経済・社会・文化などの研究領域も同じく要求される。つまり、日本の日本研究・国際日本研究は学際的であることが必須であり、他の学術領域と相互に連結しなければならない。これにより、国際地域研究もまた同じく重要である。

自らの国家と、その他の国家、自らの地域と、その他の地域、自らの文化と異文化が同時に対象化され、相互理解が齎す平和と安定的な国際関係に基づき、地域的平和の構築の上で、地域研究の実行は、その必要性を持つ。学長は、この構想によって、新しい協力モデルを列挙し、人文学と社会科学の対話へ邁進する・如何にして東アジアの越境空間を解読するか・若き研究人材を育成する等を中心として、国際共同研究化の可能性などを課題とする、と述べた。

(Web サイト: https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php)

(原稿:蔡珮菁・日文系副教授)

(日本語訳:齋藤正志・日文系副教授)